慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ピレンヌ著 高村象平他訳 中世ヨーロッパ経済史
Sub Title	
Author	渡辺, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.4 (1957. 4) ,p.330(100)- 331(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19570401-0100
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570401-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ピレンヌ著
高村象平他訳

『中世ヨーロッパ経済史』

原著は一九三三年に刊行された。当時ヨーロッパの学界では個別研究が大いに進み、これら諸成果を取入れた真に豊かな要約書の出現が待望されていた。中世と近世初頭の概説に対する要望は特に強かった。ピレンヌはこのようなときに、しかも彼の最後の著作の一つとしてこの書を書き下した。

そこにはピレンヌの長年の蓄積が見事に開花していた。今度これが立派な訳者たちを得て邦語に移され、我が国で数多く公刊されている西洋経済史の概説書に異彩を加えた。この訳書が刊行されるまでの経緯は「あとがき」に詳しい。また原著がピレンヌの諸著作のなかで占める位置については、付録の「アンリ・ピレンヌ―人と業績―」によって十分に尽くされている。ここでは、原著がヨーロッパ経済史の概説書として有する意味あるいは特異点といったものを浮彫りすることによって書評の責をふさぎたい。従って蛇足のそしりは免かれない。

翻訳書を書評しようという場合、本格的な態度としては、翻訳の仕方そのものに対する批判を主とすべきであった。そのような書評は別の人により試みられるのを待つのみである。もとより筆者のよくするところではない。むしろ筆者にはその資格すらない。ただつたない一文を綴って御恵与の御厚情に報いるのみである。

中世のような長くそして複雑な時期についてヨーロッパの経済・社会の歴史を概説することは困難な課題であった。しかしそれはピレンヌによってこの書において見事に果された。これを読む誰もが、諸変化の意味するものを徹底的に究明しようとする彼の態度、かくして得られた成果を巧みにまとめ上げた彼の偉大な綜合力に驚歎するに違いない。

この書を一読して、ピレンヌが商業関係に重点を置いていたことが知られる。彼は、もしカロリング時代に古代世界の経済的均衡が破れたとすれば、それは、東西の貿易関係がアラブの侵入によって妨碍されたからであったという事実を重視した。それから二世紀にわたり地方市場的経済が支配的で、経済生活のあらゆる側面は収縮した。十二世紀における商業の復活は彼にとり同じく重要な出来事であった。著者はこの商業の二つの重要な方向について述べている。一つはヴェネツィアをビザンツ帝国やイスラムと結ぶもの、他はスカンディナヴィア人をバルト海・北海・ロシアへいたらしめる動きであった。より後に地中海とアルプスの北部にイタリー貿易の発展が起った。フランドルの毛織物工業も国際貿易の大きな基礎となった。ピレンヌは、八世紀以来ほとんど完全に消滅していた都市生活の復活を示し、商人が新しいものを建設するに際して果した大きな役割を強調していた。

農村の諸階級と、十二世紀以降に起った農業上の諸変化に対して捧げられた部分は大いに参考になる。人口の増加・荒廃地の開墾・開発村の設定とその意義はよく示されている。ピレンヌは都市の農村に対する影響を他の論者以上に重視した。彼は貨幣経済の進展が地代を現物から金納に変化せしめたことを強調した。そしてこの転化こそが十三世紀を通じて農奴解放を促進したと考えた。

続いてピレンヌは貿易関係の重要性・大市・鋳貨・信用・財政について述べた。教会は微利の禁止を続けた。しかし実際の必要から教会法は侵害された。大規模な貿易の目的と方向を記述してピレンヌは、その資本主義的性格を強調した。

都市経済・工業規則・商人ギルドに関する部分は同様に興味深い。最後の章で著者は、十四・五世紀において起った諸変化が、中世を終結せしめた社会的混乱にいかに大きく影響したかを示した。この時期は又、著者によれば、国家の経済生活への介入という、次の世紀に本格的な展開を示した重商政策を紹介した時代でもあったのである。

概説書は絶えず書き改められなければならない。原史料による着実な研究の進展は新しい問題を提起し、そしてこれに新しい解答を与え、かくして概説のための必要をつくり出した。おびただしい概説書の刊行はこのような事情によった。特にそのなかでも、中世ヨーロッパの経済・社会に関するピレンヌのこの概説書は他に類がない。それは最初ゴルツの一般史のなかに、中世文化の一般的概説の一部として現われた。後に一九三六年には英訳されている。

知られるごとく、原著は、中世の経済発展に関する短篇であった。しかも傑作であり、最も輝かしいものの一つであった。その内容は中世ヨーロッパの一般史に興味を寄せるすべての人々に本質的なものであった。しかし最初それが教科書として書かれたのではないという事実は、最初から教科書として企図された普通一般の概説書と違い原著を、人間の事実に関心を寄せる一般の読者には、歴史の専門的な読物と感ぜしめるに違いない。

（渡辺国広）

ウィリヤム・Z・フォスター著

『世界労働組合運動史概観』

Outline History of the World Trade Union Movement, 1956, by William Z. Foster

一

ウィリヤム・Z・フォスターは、アメリカ共産党の指導者であり、労働組合運動に古い経歴をもっている。しかしながら、彼は政治的な実践活動や労働運動において、すぐれた指導者であるばかりでなく、多くの学問的な著作をしていることは、あまねく知られているところである。たとえば、「三つのインターナショナルの歴史」、「米国史における黒人」、「アメリカ共産党史」、「アメリカ政治史」、「世界資本主義のたそがれ」などで、いまここに紹介を試みる、「世界労働組合運動史概観」は、その主要なもののひとつであり、最近の労